

漢方トゥデイ

2023年6月1日放送

ストレスと漢方⑩

ストレスで悪化し、西洋医学だけでは解決できず漢方が有効であった事例 その2

三重大学医学部附属病院 漢方医学センター 高村 光幸

みなさんこんばんは。アンニョンハシムニカ。多国語による挨拶も、だんだんネタが尽きてきましたね。しかし、ストレスで悪化し、西洋医学だけでは解決できなかった症状に漢方が有効であった事例の紹介は、まだまだ尽きませんよ。

1 例目

まず、釣藤散が有効だった浮動感、後頸部痛、眼瞼痙攣の症例です。

60代男性で、糖尿病の内服治療をされています。半年前から頭のフワツとするふらつき感がみられるようになり、頭部の画像検索など受けましたが、異常は認められませんでした。1か月前にゴルフからの帰宅後、後頸部から肩にかけて違和感、倦怠感がみられ、さらに呼吸困難を自覚したために救急搬送を依頼したといます。頭部CTなどの緊急精査で異常は認められませんでした。しかしその後も、後頸部から肩にかけて、鈍痛、ジンジンと痛む感じ、ほてり感が持続しました。複数の病院で検査を受けましたが、原因は不明でした。眼瞼痙攣も伴うといます。これらの諸症状は、抗不安薬である程度緩和されるようですが、十分ではないとして漢方治療を希望されました。脈は沈弱、舌は胖大で暗調、苔はあまりなく、歯痕を伴います。腹力は中等度、軽度の小腹不仁以外はあまり所見がありません。西洋医学的には心身症としかいえませんが、漢方的には肝血虚に伴う肝風内動による身体上部の症状と考えられましたので、釣藤散を処方したところ、浮動感、眼瞼痙攣、後頸部や肩の違和感いずれも改善し、半年間の服用で症状消失、その後経過をみても再燃しませんでした。

『漢方診療医典』によると、釣藤散は中年以降の神経症で、頭痛、めまい、肩こり、項背拘急、すなわち首の後ろから背中にかけて筋肉が凝る症状などを、主訴とするものに用いるとあります。このような症例が典型的なものなのかなと感じる経過でした。

2 例目

次は、咽頭の不快感を訴える症例です。

70 代男性。咽頭下部に痰のひっかかるような感覚が持続し、耳鼻科を複数カ所受診したところ、ようやく副鼻腔炎の可能性を示唆され、西洋医学的な治療を受けましたが、画像を含む検査所見は改善しても、1 年近く自覚症状が改善しないとして漢方治療を希望されました。心房細動、前立腺がんが治療中でした。同伴された奥様からは、神経質な性格を指摘されていて、心因性の症状であるような感じも受けます。明らかにストレスで悪化するようなので、気滞や痰飲を考えました。脈は滑、やや紅い舌で、白膩苔を伴います。腹力はやや強く、大動脈拍動を広範囲に触れました。

まず半夏厚朴湯を処方しましたが、改善ありません。そこで、かつて脳漏とも呼ばれた重症の蓄膿症、すなわち副鼻腔炎に対して伝統的に用いられてきた、辛夷清肺湯に変更しました。また、下痢や腹痛もあるということで、平胃散をこれに併用して処方したところ、咽頭症状も下痢腹痛も改善して、次第に訴えはなくなっていきました。

平胃散は、一般に消化器疾患に用いられる処方ですが、浅田宗伯の『老医口訣』には、なかなか治らない病人や、適切な処方を見つけるのが難しいときに、かまわず平胃散を用いると軽快するものだ、というような記載があります。1 年以上改善しなかったこの症例にも、追加することでそのような効果があったのでしょうか。平胃散は、湿邪による脾胃の症状を改善させる祛湿剤に分類されるもので、多くの加味方、バリエーションを持つ処方でもあります。そして、伝統医学的には痰飲を消す作用があるとされるものです。「怪病多痰」、つまり、原因のよくわからない病気には痰、痰飲が多いという意味の言葉がありますが、この症例のように、画像ではきれいに治っていても、自覚症状は続くような原因不明の病態には、痰飲が隠れていると考えてよいかもしれませんね。

3 例目

さて、咽喉頭の詰まり、痞えが気になって仕方がない症状というのは、漢方領域では梅核気、咽中炙癢として有名ですが、口の中が気になってしょうがないという症例も、治療があまりうまくいかないために紹介されることが珍しくありません。

まずは、唾液が気になるという 60 代男性。高血圧と糖尿病があり治療中です。1 年ほど前から、唾液の量が多いような自覚があり、飲み込むと嘔吐しそうになるほどだといいます。仕事帰りに特に量が多くて気になり、唾液をはき出したくなるといいます。何かに集中しているときは気にならないという感覚もあるようですが、外来でその話をすると、慌ててティッ

シュを取り出し、そこに吐き出そうとまですることがあります。耳鼻科や口腔外科の精査でも異常はなく、精神科にも受診しましたが改善ありませんでした。本人いわく、ドロツとした唾液で気持ち悪いとのこと。脈は洪脈、舌は淡紅色で白苔が目立ちます。歯痕も伴っていました。腹部はやや力なく、心下痞硬と小腹不仁をみました。

複数の方剤を処方しましたが、どれも改善がいまひとつでした。いろいろ考えたあげく、竹茹温胆湯を処方したところ、急に改善があり、唾液がほとんど気にならなくなっていき、問題なくなりました。

竹茹温胆湯も化痰、つまり痰飲を解消する力があります。まさに「怪病多痰」といった感じのする訴えでしたが、それまでの処方ではよくならなかったのに、急に良くなったので私も驚きました。

4 例目

次の2例は舌痛症、いわゆる口腔内灼熱症候群というカテゴリーに含まれる症状です。

まず60代女性。口腔外科などの精査では、舌痛症の原因となるものは認められませんでした。不眠、咽の痞え、耳鳴りを伴います。脈は弦、腹部は腹力中等度で胸脇苦満、心下痞硬、臍上悸と小腹鞭満を認めます。舌は胖大で、淡舌色をしています。薄白苔が全体を覆っていて、歯痕も目立ちます。先端にはやや舌乳頭が目立ちました。

いくつかの処方を試した後、抑肝散にブシ末とヨクイニンを加えたところ、症状が改善しました。日常生活に気にならない程度で抑えられるようになったため、1年半ほど経過した頃に漸減したところ、痛みが再燃したので、また元の量に戻すと、そのまま安定して経過しました。ブシは鎮痛、ヨクイニンは消炎を目的に追加したというものです。

5 例目

続いて50代女性。10年以上前の歯科治療を契機に、歯の痛みを感じるようになったが、結果的に歯科的には異常なく、そのうち舌にも痛みを感じるようになったといいます。神経ブロックなどの、各種疼痛治療を受けても改善なく、不眠、憂鬱感やイライラもあるということでした。脈は弦、舌にはしきりに痛みの訴えはあるものの、特記すべき所見はなく、中央に一筋の裂紋のみをみます。腹力中等度で、胸脇苦満軽度、心下痞硬と臍傍圧痛、小腹不仁がみられます。検査にて唾液量は問題ないと評価されていますが、飴やガムを食べると痛みが軽くなるということでした。肝気鬱結が長引き、これに伴う陰虚を呈していると考え、滋陰至宝湯と麦門冬湯を併せて処方したところ、舌痛は軽快し、イライラも気にならない程度となりました。

私が舌痛症の患者さんに用いる処方としては、以上に挙げたような抑肝散、滋陰至宝湯が多いのですが、これは五臓の肝の血虚や陰虚が背景にあると考えられる症例が多いことに

よるものです。本来の舌痛症とは少し異なりますが、和田東郭は『蕉窓雑話』のなかで、小児で口や舌が荒れてお乳を吸うことができないものは肝の状態に関連し、芍薬を加えた抑肝散がよいと述べていますし、香月牛山の『牛山活套』には、陰虚火動によって咽が痛くなるものには、滋陰至宝湯の類いを用いると奇効、すなわち不思議な効き目があると述べています。このようなところを参考にしていると考えてください。